

夢追いバンドマンにとって音楽活動は「仕事」なのか？

——労働／余暇の二元論的思考を超えて——

名古屋大学大学院 野村駿

1 目的

本報告の目的は、「音楽で成功する」といった夢を掲げ、その実現に向けて活動するロック系バンドのミュージシャン（以下、バンドマン）を事例に、創造性と芸術性を特徴とする音楽活動に従事する若者が、自身の活動をいかに意味づけているかを、仕事／趣味の概念に着目して検討することである。ワークライフバランスが労働政策において鍵概念になっている一方で、すべての職業が労働（ワーク）／余暇（ライフ）というように明確に弁別可能なわけではない。本報告では、労働／余暇の境界が曖昧な職業として、音楽活動に従事するバンドマンを取り上げ、彼らによって自身の活動が、仕事／趣味の両概念の中でいかに意味づけられているのかを検討し、ア priori に設定されるのではない形で、労働／余暇を捉える視座の導出を試みる。

2 方法

本報告では、報告者が2016年4月から実施している、愛知県で活動するバンドマンを対象としたインタビュー調査のデータを用いる（20～31歳の計30名）。報告者はこれまで、愛知県に所在する150～250人規模の複数のライブハウスにて、バンドマンの活動状況を観察するとともに、許可の得られたバンドマンに対し、原則個別にインタビュー調査を実施してきた。インタビュー時間はいずれも1時間から3時間程度、インタビュー回数は1人当たり1回から4回である。

3 結果

主な知見は次の3点である。第1に、バンドマンは、自身の音楽活動を趣味ではないと明言する一方で、仕事だと明言できずにいた。つまり、彼らにとって音楽活動は、趣味でもなければ仕事でもない何物かだったのである。そこで、彼らが自身の活動を趣味とは切り離し、また仕事に包摂できない理由をそれぞれ検討した。その結果として、第2に、時間や金銭といった様々な資源を投入してきたという経験や生業にしたいという志向性が、趣味ではないことを正当化する根拠として提示されるとともに、プロのバンドマンを参照軸とした活動内容の差異によって、仕事だと明言できない状況が生起していた。後者については、第3に、音楽活動を仕事と明言するバンドマンの語りをさらに検討し、プロのバンドマンと同じように音楽活動を組織化することで仕事と認識できるようになっていることがわかった。

4 結論

本報告の知見は、単に労働／余暇、仕事／趣味といった二元論的思考の限界を示すにとどまらない。それは、労働／余暇、仕事／趣味の境界が曖昧化する特有の時期が存在することを示している。つまり、学校から職業へと移行する間に、職業達成という固有の「間断」が存在するのである。本報告で対象としたバンドマンは、音楽活動を仕事にすることを目指して活動しているために、この「間断」が、彼らの音楽活動に対する仕事／趣味の意味付けに影響を与え、それゆえに趣味ではないと言い切れる一方で、仕事であるとは言い切れない状況を生み出していたのだと考えられる。今後の研究は、こうした「間断」それ自体を検討対象に、労働か余暇かという二元論的視点では捉えきれない実態を明らかにしていく必要がある。